

②状態

見守り活動の対象者を状態別にみると(表 19、図 10)、健康状態が主であるが、経済面・家庭環境の問題も捉えられている。

表 19 現在の見守り活動対象者の有無

状態項目	人数	%
寝たきり高齢者	4	16.7
認知症のある高齢者	4	16.7
健康状態のよくない高齢者	11	45.8
経済的な問題を抱えていると思われる 高齢者	1	4.2
家庭環境に問題があると思われる高齢	3	12.5
その他	5	21.7

(複数回答)

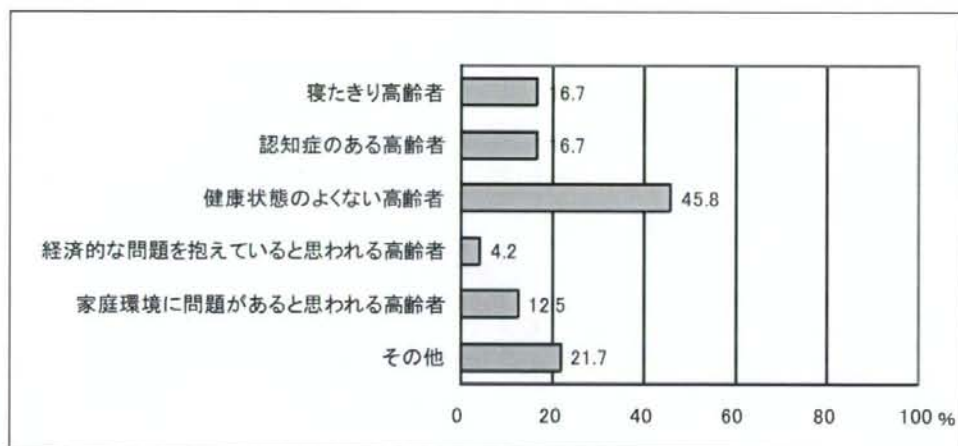


図 10 現在の見守り活動対象者の有無(複数回答)

③内容

見守りの内容別にみると(表 20、図 11)、自らの訪問のみならず、近隣等と協同で行っている。

表 20 見守り内容

	人数	%
訪問	17	51.5
電話	7	21.2
家の外から見守り	7	21.2
協力員・近隣から伺う	2	6.1
その他	5	15.2

(複数回答)

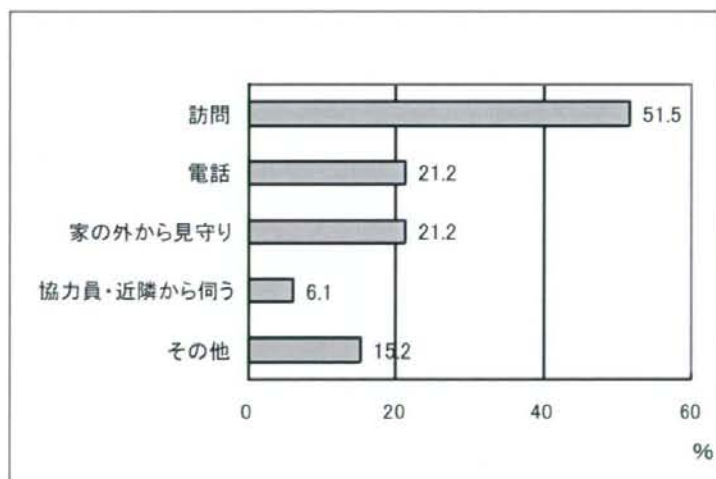


図 11 見守り内容 (複数回答)

(3)見守りしている人数と頻度

①人数

見守りしている人数は、5人以下が最も多かった(表21)。

表 21 見守り内容別にみた見守りしている人数

見守り人数	訪問人数		電話人数		近隣者からの情報を得る人数		様子をうかがう人数
	人数	%	人数	%	人数	%	
5人以下	11	33.3	1	3.0	0	0.0	7
6~10人	1	3.0	1	3.0	1	3.0	0
11~15人	2	6.1	1	3.0	0	0.0	0
16~20人	0	0.0	1	3.0	1	3.0	0
21~25人	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0
26~30人	1	3.0	1	3.0	0	0.0	0
31人以上(~45人)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0
不明	2	6.1	2	6.1	0	0.0	0
無回答	16	48.5	26	78.8	31	93.9	26

(複数回答可)

②頻度

表 22 見守り内容別にみた見守り頻度

見守り頻度 (1回/日)	訪問日		電話日		近隣者からの情報を得る日		様子をうかがう日	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
不定期	0	0	1	3	0	0.0	0	0
毎日	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	3.0
2~3日	2	6.1	1	3.0	0	0.0	0	0.0
4~7日	3	9.1	0	0.0	0	0.0	1	3.0
8~10日	2	6.1	1	3.0	1	3.0	1	3.0
11~14日	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
15~30日	6	18.2	1	3.0	0	0.0	2	6.1
約2ヶ月	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
約3ヶ月	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
約半年	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	20	60.6	29	87.9	32	97.0	28	84.8
合計	33	100	33	100	33	100	33	100

(1回/日、複数回答)

(4)見守りに行ったいきさつ

見守りに行ったいきさつ別にみると(表 23、図 12)、「一人暮らしや75歳以上の高齢者世帯の実態把握から」が16人(64.0%)と最も多くみられた。

表 23 見守りに行ったいきさつ

項目	人数	%
本人からの相談	4	16.0
同居家族からの相談	1	4.0
近所のひとからの相談	6	24.0
別居家族や親族等の相談	3	12.0
最近見かけなくなったなどの行動変化の気付き	4	16.0
ケアマネや専門職などから依頼	1	4.0
一人暮らしや75歳以上の高齢世帯の実態把握から	16	64.0
その他	3	12.0

(複数回答)

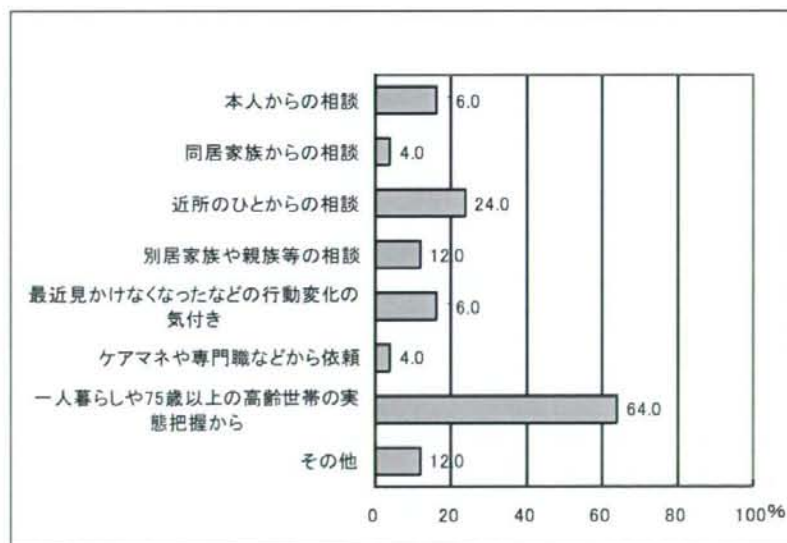


図 12 見守りに行ったいきさつ

(5)見守りの際の留意事項

見守りの際に注意していることを項目別にみると(表 24、図 13)、「健康状態」が 21 人(84.0%)と高いが、多岐にわたり留意されている。

表 24 見守りの際の留意事項

項目	人数	%
健康状態	21	84.0
認知症の度合い	2	8.0
病院のかかり具合	8	32.0
薬の飲み方	1	4.0
食事の回数・量	4	16.0
身体の清潔	0	0.0
家屋内の状態	2	8.0
火の始末	7	28.0
外出の機会	6	24.0
訪問者の状況	4	16.0
経済事情	0	0.0
助けを求める能力	0	0.0
その他	3	12.5

(複数回答)

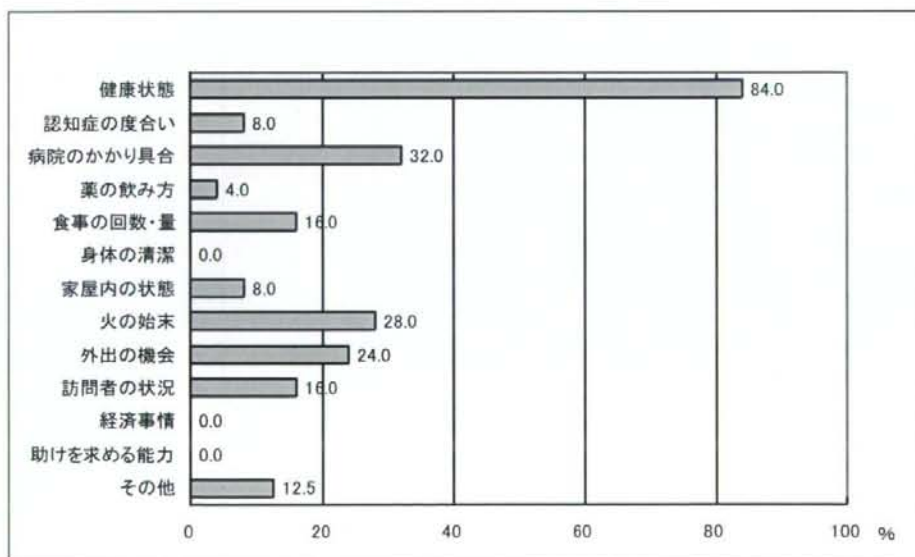


図 13 見守り時の留意事項

(6) 地域での見守り基準の有無とその内容

① 有無

地域内での見守り基準の有無をみると(表 25)、「決めている」が1人(3.0%)、「決めていない」が26人(78.8%)、「無回答」が6人(18.2%)であった。地域での見守り基準を決めているところはほとんど見られず、それぞれが自分の基準で行っている割合が高かった。

表 25 地域内における見守り基準の有無

	n	%
決めている	1	3.0
決めていない	26	78.8
無回答	6	18.2
合計	33	100.0

② 早期に対応できた事例の有無

校区内における見守りの基準の有無で「決めている」と答えたもので、見守りの基準により早期に対応出来た事例の有無をみると(図 14)、「ある」が2人(6%)、「ない」が12人(36%)、「無回答」が19人(58%)であった。

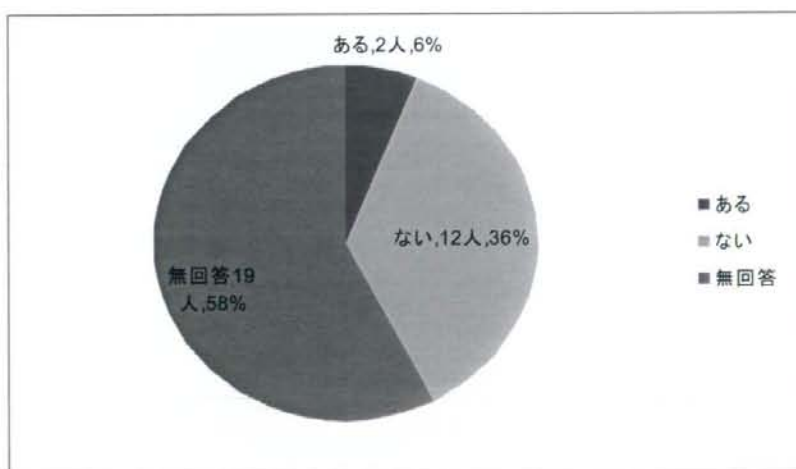


図 14 見守りの基準により早期に対応出来た事例の有無

(7)見守りの効果

見守りの効果を項目別にみると(表 26、図 15)、見守りが次の援助につながったり、早期把握、地域の結びつき・連携に影響していると回答されている。

表 26 見守りの効果について

内容	人数	%
困っている方を早期に把握できた	6	22.2
困っている方の援助につながった	9	33.3
孤立している方を早期に把握できた	1	3.7
孤立している方の援助につながった	1	3.7
困ったことがあれば、相談をしてもらえるようになった	15	55.6
地域の方々の結びつきが強くなった	8	29.6
地域での他職種間の連携がよくなった	1	3.7
その他	1	3.7

(複数回答)

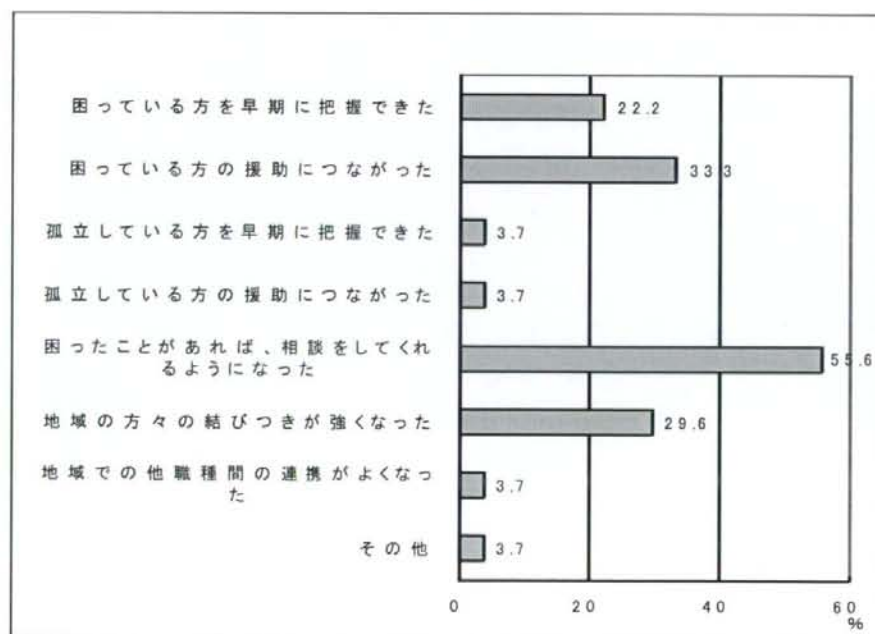


図 15 見守りの効果について

(8)見守りの困難な点

見守りの困難な点は、自分が忙しくて見守りができない、が最も多く、情報が得られにくい、自分ひとりでの見守りは荷が重いという点があげられた。

表 27 見守りをする上で困難に思う点

内容	人数	%
本人から見守りを拒否される	0	0.0
家族から見守りを拒否される	2	11.1
不在など本人の動向がつかめない	2	11.1
情報が得られにくい	8	44.4
自身が忙しくて見守りができない	9	50.0
自分ひとりでの見守りは荷が重い	5	27.8
その他	4	22.2

(複数回答)

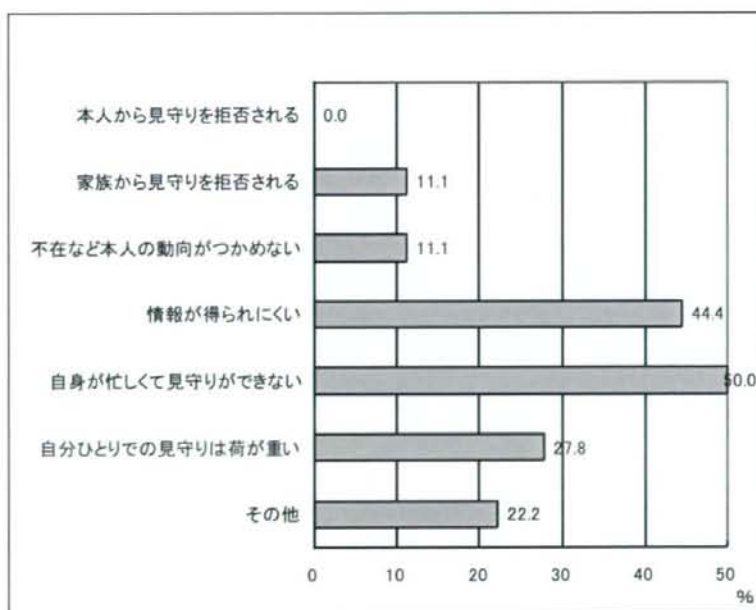


図 16 見守りをする上で困難に思う点

(9) 担当地区の高齢者の人数の把握の有無

担当地区に住んでいる高齢者の人数把握についてみると(表28、図17)、「わかる」が18人(54.5%)、「ほぼわかる」が8人(24.2%)で、この2項目で8割弱を占めている。

表28 担当地域に住んでいる高齢者人数を把握しているか

	人数	%
わかる	18	54.5
ほぼわかる	8	24.2
少ししかわからない	1	3.0
わからない	1	3.0
無回答	5	15.2
合計	33	100

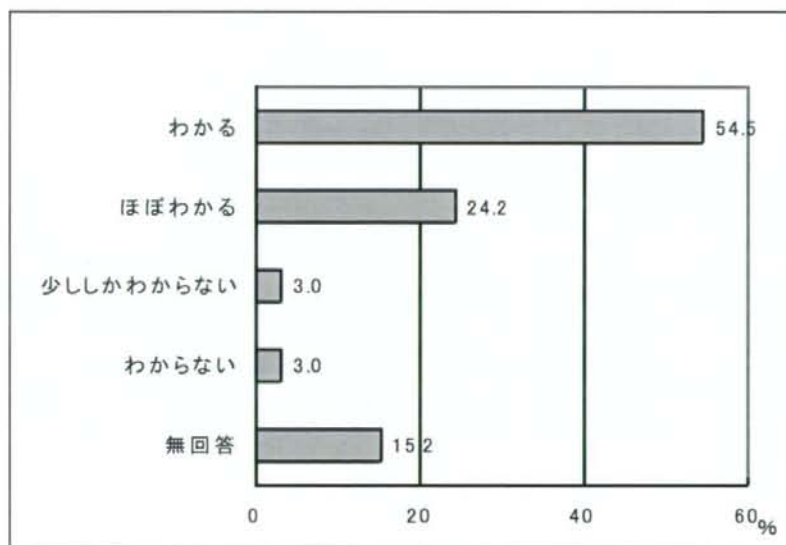


図17 担当地域の高齢者人数把握状況

表 29 校区別にみた担当地域に住んでいる高齢者人数の把握状況

		わかる	ほぼわかる	少ししかわ からない	わからない	合計
久寿軒	人数	1	0	0	0	1
	所属校区別の%	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	5.9	0.0	0.0	0.0	3.4
天秤	人数	1	1	0	0	2
	所属校区別の%	50.0	50.0	0.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	5.9	12.5	0.0	0.0	6.9
大杉	人数	0	1	2	1	4
	所属校区別の%	0.0	25.0	50.0	25.0	100.0
	回答項目別の%	0.0	12.5	66.7	100.0	13.8
川口	人数	0	1	0	0	1
	所属校区別の%	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	0.0	12.5	0.0	0.0	3.4
立川	人数	0	1	0	0	1
	所属校区別の%	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	0.0	12.5	0.0	0.0	3.4
穴内	人数	0	2	0	0	2
	所属校区別の%	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	0.0	25.0	0.0	0.0	6.9
大田口	人数	2	1	1	0	4
	所属校区別の%	50.0	25.0	25.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	11.8	12.5	33.3	0.0	13.8
豊永	人数	0	1	0	0	1
	所属校区別の%	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	0.0	12.5	0.0	0.0	3.4
大砂子	人数	3	0	0	0	3
	所属校区別の%	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	17.6	0.0	0.0	0.0	10.3
岩原	人数	2	0	0	0	2
	所属校区別の%	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	11.8	0.0	0.0	0.0	6.9
東豊永	人数	3	0	0	0	3
	所属校区別の%	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	17.6	0.0	0.0	0.0	10.3
西峰	人数	5	0	0	0	5
	所属校区別の%	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
	回答項目別の%	29.4	0.0	0.0	0.0	17.2
合計	人数	17	8	3	1	29
	所属校区別の%	58.6	27.6	10.3	3.4	100.0
	回答項目別の%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(10)担当地区の高齢者で情報が得られにくい方の有無

担当地区の高齢者で情報が得られにくい方の有無をみると(図 18)、「いる」と答えたものが 6 人(18.2%)、「いない」と答えたものが 21 人(63.6%)、「無回答」が 6 人(18.2%)で、過半数がいないと回答していた。

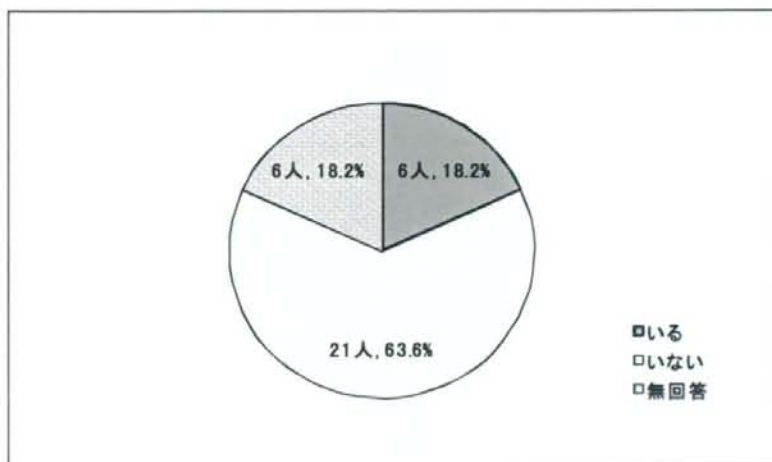


図 18 担当地域高齢者で情報が得られにくい方の有無

(11)小地域ネットワーク「高齢者のふれあい・世代間交流・子育てサロン・個別援助」システム認知の程度

「高齢者のふれあい・世代間交流・子育てサロン・個別援助」システムの認知の程度は、約 4 割が知っていると回答していた。

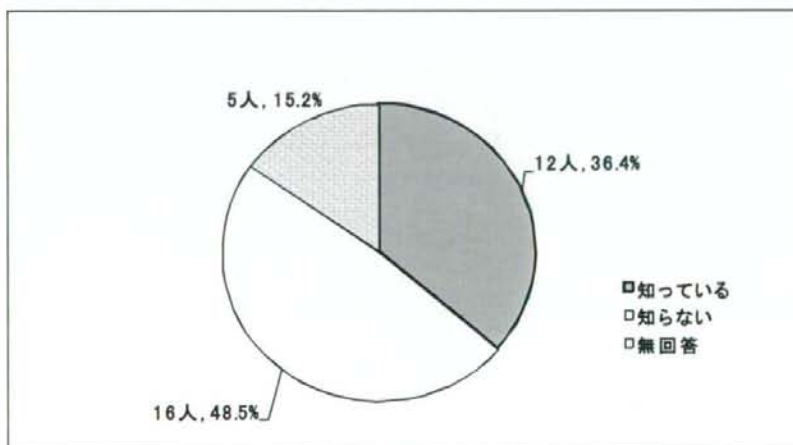


図 19 「高齢者のふれあい・世代間交流・子育てサロン・個別援助」システムの認知の程度

(12) 小地域ネットワーク 「高齢者のふれあい・世代間交流・子育てサロン・個別援助」システム活用の程度

「高齢者のふれあい・世代間交流・子育てサロン・個別援助」の活用の程度は、約1割が活用していると回答していた。

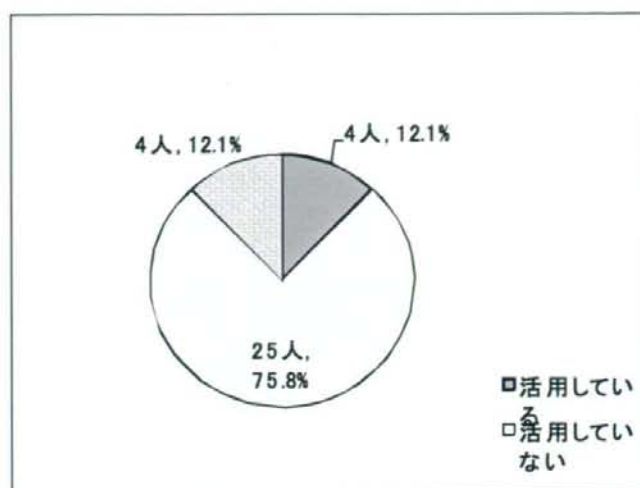


図 20 「高齢者のふれあい・世代間交流・子育てサロン・個別援助」の活用の程度

(13) 見守り活動についての意見

表 30 見守り活動についての意見

現在行っていること・見守りの良い点

- ・ 訪問回数を多くして声かけすること 姿が見えないときは自宅を見直すこと
- ・ 高齢者のみの世帯 高齢者世帯が地域の大半を占めており、民生員一人では無理だが、健常者が多いので助かっている。
- ・ 一人暮らしの廻りにはボランティアがいて情報を提供してくれる

見守りで困難に思うこと・協力体制について

- ・ 広範囲になると地域の連携がないと厳しい
- ・ 本人・個人の問題なのに本人の責任とか家族の役割感が薄れて公に頼る考え方が多くなった。家族の絆を考えるべき
- ・ 勉強不足なので指導して欲しい
- ・ 見守り活動は近所でないとできない 時間と費用が必要

(14) 見守り活動に対する態度

表 31 見守りの態度

	n	%
変更する必要あり	5	15.2
適当	18	54.5
合計	23	69.7
無回答	10	30.3
合計	33	100

6) 孤立死の状況

(1) 孤立死の言葉の認知の程度

「孤立死という言葉を知ったことがあるか」という問いに対し、「ある」と答えたものは25人(75.8%)で約8割が聞いたことがあると答えた(図21)。

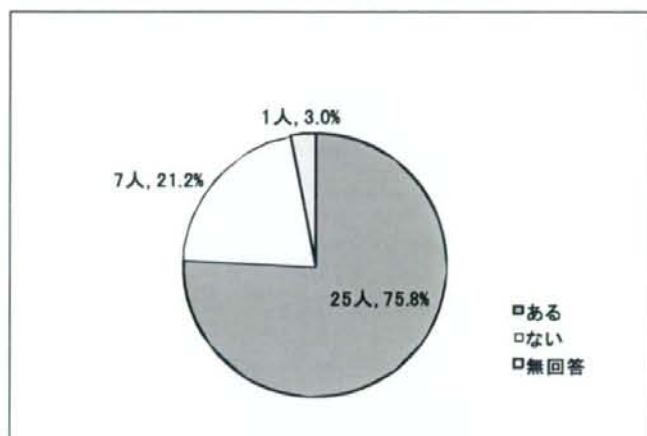


図 21 孤立死の言葉の認知の程度

(2) 担当地区で孤立死の危険性が高いと考えられる方の有無

① 有無

「担当地域で孤立死する危険性が高いと考えられる方はいるか」という問いに対し、「いる」と答えたものは5人(15.2%)で「いない」と答えたものは24人(72.2%)、「無回答」は4人(12.1%)であり(図22)、2割弱が危険性の高い人がいると回答している。

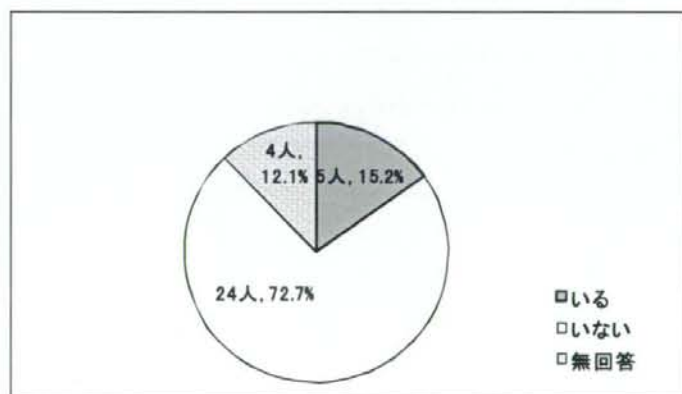


図 22 担当地域で孤立死の危険性が高い方の有無

②理由

①において、孤立死の危険性が高いと思った理由として表 32、図 23 をみると、健康状態がよくないことに加え、人の出入りが少ないなど、社会的に孤立していることが孤立死のハイリスクと認識されていることがわかる。

表 32 孤立死の危険性が高いと考える理由

項目	人数	%
見守りや援助を拒否する	3	11.1
外出しない	3	11.5
近所づきあいがない	3	11.5
意欲や気力ががない	2	7.7
人の出入りが少ない	4	15.4
健康状態がよくない	3	11.5
医療拒否	1	4.0
その他	1	3.8

(複数回答)

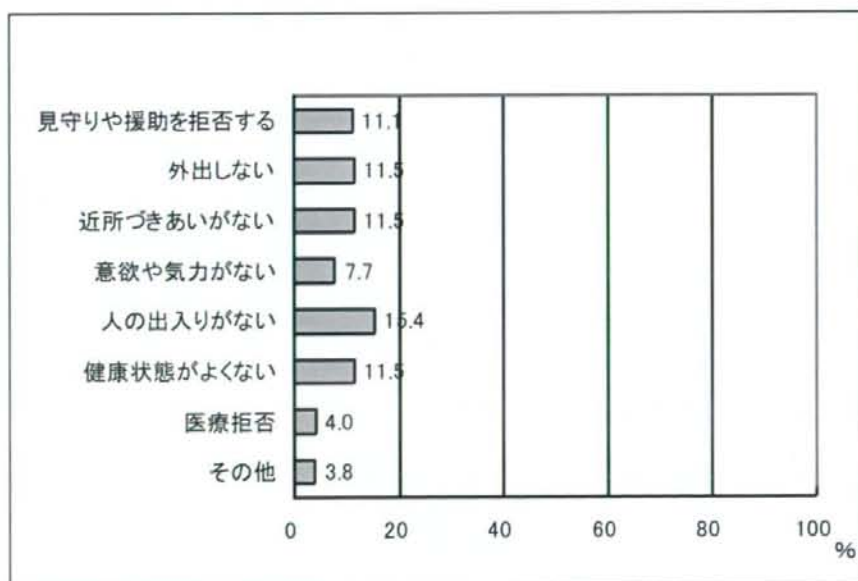


図 23 孤立死の危険性が高いと考える理由

(3)過去の担当地区での孤立死の有無

①有無

「過去に担当地域で孤立死があったか」という問いに対し、「あった」と答えたものが1人(3%)、「ない」と答えたものが28人(84.8%)で、約8割が孤立死はなかったと回答している(図24)。

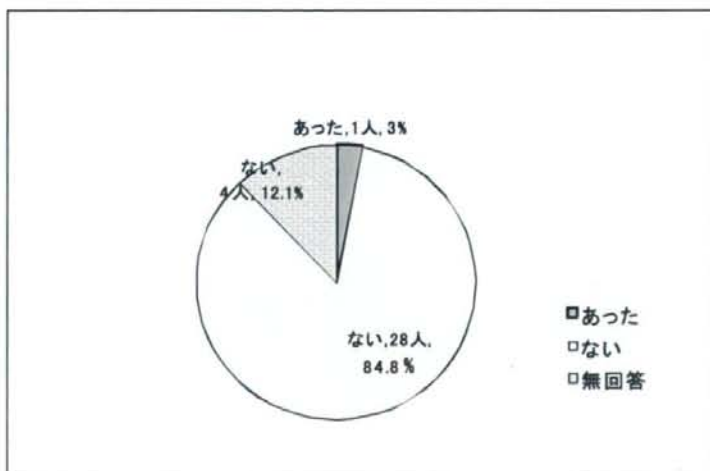


図 24 過去の担当地域での孤立死の有無

②様子

(4)ボランティアの見守りによる孤独死予防の可能性の有無

「孤立死をボランティアの見守りで防げるか」という問いに対し、「まったくそう思う」と答えたものが3人(9.1%)、「そう思う」と答えたものが20人(60.6%)で、過半数が見守りで防げと思っている(図25)。

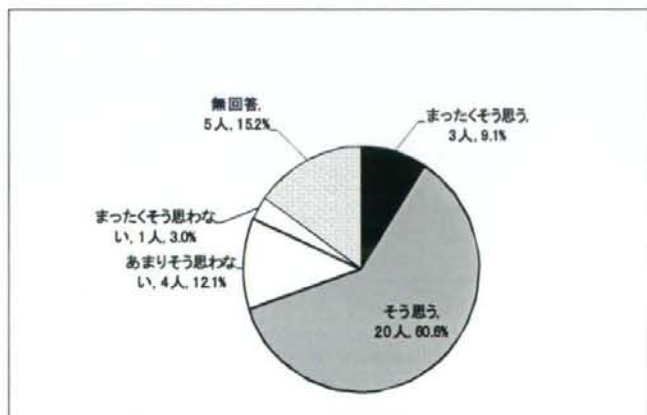


図 25 孤立死をボランティア活動の見守りで予防できると思うか

(5) 孤立死を防ぐための方法の提案や意見（自由回答）

① 家族や本人ができること

家族・親戚との連絡が最も多かった(表 33)。

表 33 孤立死を防ぐため家族や本人が出来ること

-
- ・ 家族の絆・親戚の役割などが昔と違って薄くなって自分のことのみ考える人が多くなって横とつながらず孤立することが多くなった。戦後教育の悪い面と思う
 - ・ 皆が集まるところに出てきてもらい、茶話会をする
 - ・ 早く気づくように心がける
 - ・ 近所親戚と日頃から連絡をとる
 - ・ 安否確認体制の確立 近隣者との連携 緊急通報システム設置 日常的な見守り
 - ・ 独居世帯の見守りを3～5世帯にして毎日確認する取り組みづくり
-

② 地域でできること(表 34)

見守り活動よりも、身近な隣近所等の注意等が多かった。

表 34 孤立死を防ぐために地域でできること

-
- ・ 役場の社協の定期的訪問が頼めるとありがたい
 - ・ 皆が気軽にできる活動に出かける
 - ・ 生まれ育った故郷で高齢者が孤立死を助けないといけないが、行政・地区民も協力するのが大事
 - ・ 声を掛け合う習慣
-

③ 情報公開等、情報を行政および専門機関に求める役割(表 35)

表 35 孤立死を防ぐために行政および専門機関に求める役割

-
- ・ 役所・地域担当にこまめに巡回してもらう
-

7) 地域包括支援センターについて

(1) 地域包括支援センターの認知

地域包括支援センターは 25 人 (75.8%) が知っていた (図 26)。

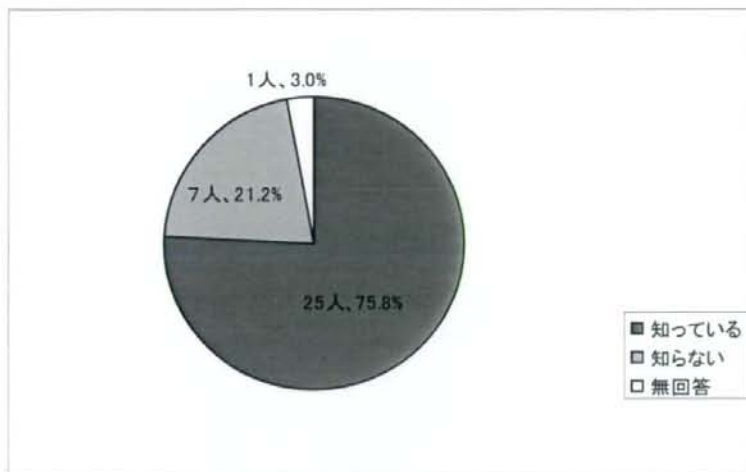


図 26 地域包括支援センターの認知度

(2) 地域包括支援センターへの相談の有無

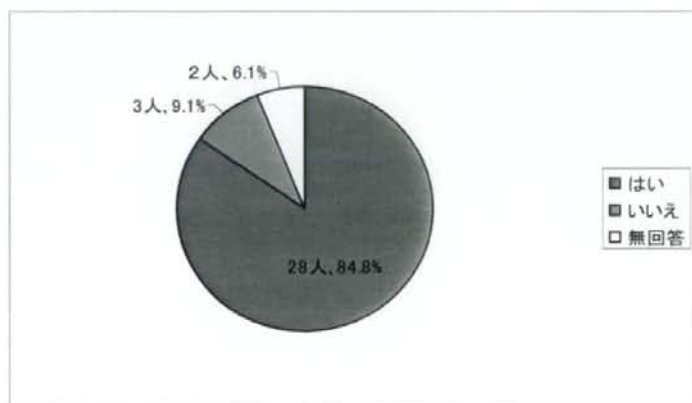


図 27 地域包括支援センターへの相談の有無

(3)見守りでこまった時の相談場所

見守りで困ったときの相談場所としては社会福祉協議会が最も多く6人(18.%)で、地域包括支援センター3人(9%)、役場2人(6%)であった。自分で解決できる3人(9%)あった(表28)。

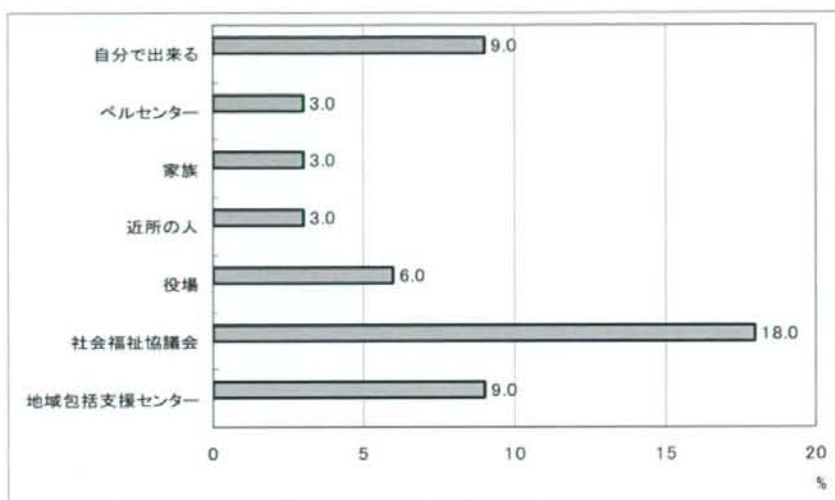


図 28 見守りで困ったときの相談場所

7)保健福祉サービスについての意見

表 36 保健福祉サービスについての意見 (自由回答)

- ・あまりにも色々関わって、深くかかわることが出来ていないことを反省している。
- ・案外私より隣近所が気をつけてくれていて、後で自分がしることがある。
- ・電話するといやがる
- ・福祉事務所の方とお話しましたが、まるで対岸の火事を見る感じ。
- ・事務所は自分たちからは飛び込むことはない。
- ・民生委員としての活動は、多岐にわたっており、一人ではとても対応できていない。

-
- ・あまりにも色々関わって、深くかかわることが出来ていないことを反省している。
 - ・案外私より隣近所が気をつけてくれていて、後で自分がしることがある。
 - ・電話するといやがる
 - ・福祉事務所の方とお話しましたが、まるで対岸の火事を見る感じ。
 - ・事務所は自分たちからは飛び込むことはない。
 - ・民生委員としての活動は、多岐にわたっており、一人ではとても対応できていない。
-

2. インタビュー調査結果

1) 目的

本章では、高齢者のセルフ・ネグレクトおよび孤立死を防ぐための地域見守り組織のありかたについて検討を行うために、高齢者の見守りに関係する地域住民と見守りが必要な高齢者を支援している専門職へのインタビューデータを基にした質的帰納的分析を行った。

本研究では、地域見守り組織としての活動は実施されていないが、日常的に住民が近隣同士で見守りをして大豊町を調査対象とした。見守りに関係する組織の代表者として、アンケート調査の対象者である民生委員と高齢者を支援している地域包括支援センターの専門職にインタビューを実施した。内容は高齢者の状況、見守り支援の実際などについて明らかにすることを目的としている。

2) 方法

(1) 調査対象者と方法

本研究のデザインは質的帰納的研究である。

対象者の概要と面接の実施状況については、表1に示すとおりである。調査対象者は、高齢者の見守りに関係する民生委員2人と地域住民と見守りが必要な高齢者を支援している地域包括支援センターの専門職2人である。2009年2月に、インタビューガイドを用いた半構成的面接を研究者2人が実施した。面接時間は約60分程度である。面接の形態は、グループで実施した。見守り組織の地域住民に面接を行う場合は、地域包括支援センター等の職員に同席してもらい、意見をいやすい雰囲気になるように努めた。

インタビューガイドの内容は、大まかには「①地区の高齢者の状況と高齢者見守り活動の現状」と「②見守り活動実施に向けての課題」とに分けられる。インタビューガイドは見守り組織の地域住民と専門職はともに、同様のものを使用した。

以上のインタビュー内容について、調査対象者の同意を得てICレコーダー等に録音し、逐語録を作成した。なお、すべての対象者から録音の同意を得ることができた。

表1 大豊町におけるインタビュー対象者の概要

[高齢者の見守りに関係する地域住民]			
面接状況	性別	年代	地域での役職
グループ面接1	男性	70代	民生委員
グループ面接1	女性	70代	民生委員
[地域包括支援センター職員]			
面接状況	性別	年代	職業
グループ面接1	女性	40代	保健師
グループ面接1	男性	40代	主任ケアマネジャー

(2)分析

逐語録から高齢者の見守り支援のありかたや組織づくりに関連すると思われる内容を意味毎にくぎり、可能な限り、対象者の表現を活用し、コードをつけた。さらに、コードをもとに、カテゴリを作成し、さらにカテゴリをまとめて、テーマとした。

(3)倫理的配慮

調査対象者には書面と口頭で本研究の趣旨、目的と方法を説明し、対象者から文書にて同意を得た。また、調査協力は自由意思に基づくものであり、いつでも中止可能であること、研究目的以外では得られたデータを使用しないことを説明した。なお、本研究は、甲南女子大学看護リハビリテーション学部研究倫理委員会から承認をうけて実施している。

3)結果

(1)高齢者の見守りに関係する民生委員へのインタビューの質的分析結果

民生委員へのインタビューから得られた質的分析についてのテーマとカテゴリを表2に示す。

表2 民生委員に対するインタビューから得られた質的分析の概要

テーマ	カテゴリ
見守り対象となる高齢者	一人暮らしの高齢者が中心
	民生委員の訪問を楽しみにする高齢者
	人付き合いを嫌う高齢者
	地域・隣近所の付き合いは密接
地域の力と見守り	土地の密着度の高さ
	地域の集まりのよさ
	地域の住民同士の連携・相互扶助
	隣近所の情報網
見守りの方法	民生委員による見守り
	民生委員と他のものとの連携
	民生委員以外の機関による見守り（行政、地域包括、保健師など）
	「地域での見守り」
見守り活動の方向性	現状維持
	民生委員による情報の共有化
	「地域での見守り」のシステム化
	人口の維持・発展
	地域の結びつきをさらに強化し、よりよい地域づくりを行政との協力
見守り困難な点	急激な高齢化・人口減
	交通の便の悪さ
	緊急時の交通手段やマンパワーの不足